お茶の水地理　第33号　1992年

房総の漁業集落の成立に関する地理学的考察
——鴨川市天面地区を事例として——

佐　藤　由美子

地理学研究において，文化現象を対象とする際にはどのような方法を用いるべきであろうか。従来の地理学研究は自然的・生態学的条件との関係に基づいた人間の集団生活を対象としている。しかし，個別的な文化現象は単に自然的・生態学的条件によって限定されるものではなく，社会的・経済的な諸関係に媒介されて成立している。このことは，社会構造を主な研究対象としている社会人類学の成果によって明らかである。また日本民俗学でも，同様の視点から考察がなされている。このことについて千葉徳爾氏は，「地域の諸要素の構造状態を分析し，地域社会の住民生活に及ぼしている作用を分類し順序づけ，それらと民俗現象との関連性のメカニズムを明らかにする方法」があるとし，それには地理学・社会学などの方法が援用されなければならないと述べている。個別文化現象が地域の諸要素の複合と相互連関作用を通して形成されているならば，当該社会の文化現象を考察する際に地理学的研究対象のみを取り扱っていては不十分といえよう。地理学研究においても学際的（interdisciplinary）な対応をする必要があると思われる。

調査対象地域の千葉県鴨川市天面地区は，改葬習俗の営まれた地域として非常に有名である。多くの調査者が天面を訪れ，民俗学的，人類学的調査・分析を行っている。このように天面の葬制は非常に重要な問題として扱われているが，改葬習俗を持つに至った天面独特の風土や背景について考察したものはほとんどない。今回の論文では，以上のような視点に基づき，民俗学的・人類学的成果を用いて，天面の集落の成立について考察することを試みたい。天面はまた，このような方法を用いた考察を行なうには格好の地域であるように思える。

近世になると，畿内で綿作が急激な広がりをみせ，その肥料に大量の干鰯を必要としたため原料の鰯を乱獲し，畿内の漁場は荒廃した。畿内漁民，特に紀州漁民は新しい漁場を求めて房総へ出稼・移住するようになった。その結果，房総には畿内の進んだ漁猟技術が伝播され，大量の鰯が捕獲できるようになった。鰯は船で干鰯問屋へ出荷され，商業経済が確立されるに至るのである。つまり，紀州漁民の出稼・移住によって，房総では自給自足的漁でなく生業としての漁業が営まれるようになり，集落は漁業集落として成立する。特に九十九里地方は，文献や民間伝承等によってその事実が明らかにされている。しかし，紀州漁民の移住が文献に明示されていない小規模の漁業集落についてはどのように成立したのか，いままであまり考察されていなかった。天面には紀州漁民にまつわる民間伝承や神社縁起等はなく，一見紀州漁民がかかわることなく成立した漁業集落のように思えるのである。しかし，天面を丹念に調査すると，紀州と関係のある事象が幾つか存在することがわかる。この事象とは漁法や改葬習俗や若者組等の社会的遺制である。改葬習俗は，房総半島では天面でしか営まれていないものであり，太平洋を媒介として他地域（紀州）からもたらされたものと思われる。また関西方面で発生した石塔文化が房総の他集落より古い時代にみられること，西日本文化とされる若者組の存在が認められること，近世の天面では紀州漁民が伝えたという漁法を行なっていたという文献が残されていることから，天面に紀州漁民が関係していることはほぼ間違いないと推測される。また天面は，その集落形態や村内婚的傾向，年齢階梯制の存在など海人系漁民集落の特徴も有している。つまり，天面は紀州漁民の出稼・移住によって成立した海人系漁業集落の可能性が強い。

紀州漁民は日本漁業史上，最も指導的な役割を担ったということができる。その広範囲で集団的な活動の結果，房総において交通至便で好漁場の控えたところは，先発の紀州漁民が占拠しているため，後続の者はさらにその先へ足を伸ばして根拠地を探さなければならなかったと考えられる。天面は，その後続の紀州漁民の植民地となった可能性が強いと思われる。